



「Refugees」誌 通巻136号より

LIBERIA リベリア

「自由の国」の 平和の祈り

フェルナンド・デルムンド 著

1989年、ダーマ・カマラはリベリアからギニアの難民キャンプに逃れた。チャールズ・テラー率いる反政府勢力がリベリアで武装蜂起したからだ。4年後、カマラはロファ州（リベリア北部）の故郷のサルカネドウ村に帰ってきた。しかしまだ不安定な状況で、やがて彼女の住む地域にも武装した男たちがやって来た。椰子と泥でできた家々に火が放たれ、カマラは再びギニアに避難するしかなかった。

2004年2月、40歳になったカマラは今度こそ故郷にとどまれることを祈りつつ、リベリアに帰ってきた。農夫の夫と5人の子どもも一緒だ。「神が、私たちをお守りくださいますように。戦争をした人たちが武器を置き平和が訪れますようにと、祈っています」と彼女は言う。

だがカマラの新しい生活には、神の仲裁以上のものが必要だ。14年におよぶ内戦で、リベリアは荒廃しきっている。町や村は瓦礫に埋もれ、森にのみこまれそうだ。モンスーンの長雨は、終わりがなく感じられた悪夢を思い神が涙を流しているのだ、と言う人もいる。

とはいえ多くの人々は楽観的だ。2003年8月、大西洋に面した首都モンロビアに反政府勢力が近づくと、悲劇の元凶であるテラー大統領はナイジェリアに脱出。人々は帰還することでリベリアの未来に票を投じた。以後、数千人の避難民が隣国ギニア、シエラレオネ、コートジボワールの難民キャンプから、あるいはリベリア国内の施設から故郷に戻り始めた。ナイジェリアやガーナから、船底に穴のあいた船に乗ってでも帰還しようとする人もいた。

テラーが去った後、ガーナで和平協定が結ばれ、死者20万人、避難民100万人近くを出した内戦に終止符が打たれた。和平協定では人口260万人の国に暫定政府を設置するとともに、2005年10月に選挙を実施することが定められた。協定には反政府勢力の「リベリア和解民主連合（LURD）」と「リ

ベリア民主運動（MODEL）」も調印した。

国際社会のさらなる努力

調印に続いて「国連リベリア・ミッション（UNMIL）」として1万5000人の平和維持部隊がリベリア全土に展開。武装解除、動員解除、再定住プログラムが始まった。2004年7月末までに、約6万人の兵士が武器を捨て、武装勢力の拠点も解放された。UNHCRリベリア事務所代表のモーゼス・オケロは「紛争が解決され、元の状態に戻らないよう、国際社会も今まで以上に大きな努力をしている。しかし、リベリアの本当の問題はこの暴力の14年間だけでは見えてこない。リベリアの歴史は1847年に『米国植民地化協会』がやってきた時にさかのぼる。リベリアには政治・経済を支配しようとする階層がいる。彼らは自分をアメリカ人だと考え、他のリベリア人からみるとアメリカ志向すぎる」。

「自由の土地」という意味のリベリアは、アメリカ大陸のアフリカ系解放奴隷によって建国され、アメリカ合衆国を範とする憲法も公布された。民族構成は多様だが、ほとんどの人はリベリア英語を話す。いくつかの地域、とくに東部の美しい港町ハーバーには南北戦争時代のアメリカ南部を彷彿とさせる古風な建物や教会がある。ただし国土の大部分は、壮大な熱帯雨林に覆われている。

転落へ

そんなリベリアが地獄に向かい始めたのは、建国から133年後の1980年。サミュエル・ドウ曹長がクーデターを起こし、大統領を処刑した時だった。ドウ自身も10年後に、テラーと「リベリア国民愛国戦線（NPFL）」が起こした反乱で暗殺された。元リベリア経済相でアメリカでの有罪判決を逃れてきたテラーだが、彼がリベリアの大統領になる前にNPFLは分裂し西アフリカは二度と昔のようにはならなかった。

権力を握り復讐に燃えたテラーは、隣国シエラレオネに目をつけた。シエラレオネには、ドウ暗殺後モンロビアでNPFL兵が大量殺戮を始めるのを防ぐべく、「西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）」の平和維持軍が集結していた。テラーと関係のあるシエラレオネの反政府勢力、「革命統一戦線（RUF）」は、シエラレオネを10年におよぶ残虐な内

戦に陥れ、2002年にイギリス軍と国連平和維持部隊の介入でようやく終結した。

シエラレオネとの国境でとれるダイヤモンド、麻薬、そして豊かな木材が、政治的に不安定な地域におけるテラーの資金源となった。リベリアの民兵と少年兵が、銃や戦利品が自由に取引されている国境地帯を越えてシエラレオネに入った。

リベリア内戦は多くのアフリカ諸国に波及したが、その一番新しい「被害者」がコートジボワールだ。かつては西アフリカの希望の星で、世界屈指のココア産出国でもあったコートジボワールでは、失敗に終わった兵士の反抗が2002年9月に大規模な反乱に発展。各勢力はリベリア兵の助けを借り、テラーはロバール・ゲイ将軍（コートジボワールの前大統領）にボディガードを提供したともいわれている。

リベリアの港町ハーパーでは、援助機関がコートジボワール国境に近いフリータウン村近郊で起きたとされる虐殺について、目撃者の話をつなぎあわせている。フリータウン村はコートジボワール政府軍に兵士を供給していたとされ、目撃者によれば2003年8月頃にヘリコプターで兵士がやってきて、村民359人を殺害し、死体は集団墓地に埋葬されたい。この地域には国連軍が展開しておらず本格的な調査は行われていない。そのため未確認ではあるが、この話は治安悪化や無法地帯拡大に対するリベリア人の不安を強めている。

故郷に向けて

国連軍がいる場所では避難民の帰還が始まっている。彼らは近隣諸国の難民キャンプにいた35万人の難民や国内20か所の施設にいた30万人の国内避難民たちだ。UNHCRは2004年10月に難民キャンプからの帰還計画を開始した。同時に、人々に若干の収入をもたらす基本的サービスの復活など、コミュニティから合意を得たプロジェクトを開始させている。

国連とともに援助団体も入ってきた。サルカネドウ村では、日本のNGO「ピースウィンズ・ジャパン (PWJ)」がUNHCRの資金提供のもと学校再建を開始し、最も貧しい700世帯に住居建設資材も支給し、給水・衛生関連施設を修復している。北部のロファ州とボンゲ州に近いグバルンガとボイジャマは、インフラが整っていないにも拘らず帰還民を惹きつけている。「とにかく何かかが必要だ」と、グバルンガのエスター・ウォーカー村長は木の下の「執務室」で語った。

ハーパー地区でも、数千人のリベリア人がコートジボワールから帰ってきて、商店やレストランが開店した。「デンマーク難民評議会 (DRC)」は、学校や診療所の再建を開始。「1日1ドル」プロジ

ェクトでは、道路や運河の清掃など住民に雇用を提供し、灯台の修復も行われている。「赤十字国際委員会 (ICRC)」は、ナタや種子を配給して、避難民が普通の生活を取り戻すのを支援している。「リベリア人は心に深い傷を負っている。多くの殺人を目にし、女性はレイプされ、家は略奪にあった。皆、自分たちの生活リズムを取り戻し、ささやかな喜びや祝いの事を再発見しなければならない」とICRCのマルク・ブニシュは言う。

リベリアの悪夢は終わったのか

反政府勢力のリーダーのなかには内戦中の行為を公に謝罪した者もいる。かつて「ブット・ネーキッド將軍」の異名をとったジョシュア・ブレイエは、ブキャナン、カカタ、トゥブマンバグなどでの狂気じみた戦いで、「無敵の存在になる」との思い込みから、完全武装の敵に兵士を裸で戦わせた。今ではその彼も伝道師だ。

テラーは去ったものの、彼のシンバはまだいる。MODELとLURDの幹部は末端の部下たちをほぼ統率できなくなっている。元戦士やLURDのメンバーが夜中に銃を発砲している地域もある。人々が怯え、逃げた後に略奪するという戦術で、内戦中に使ったのと同じだ。LURDやMODELのメンバーは、ギニアやコートジボワールの国境で帰還民に嫌がらせをしたり、村人に「税金」を強要したりするため、チンピラ同然に考えられている。

UNHCRリベリア事務所代表のオケロが初めてリベリアに来たのは1991年。難民の援助活動をしている時、当時の大統領テラーの兵士に何度も殺されそうになった。「14年以上におよぶテラーの暴政で、数千人の新しい『チャールズ・テラー』が生まれた。政治や経済の状況が改善しないかぎり、彼らがリベリアの未来に影を落としている」と言う。弱体化したリベリアに、近隣諸国が何をしてくるか、予測のつかないことは、まだいろいろある。



シエラレオネから帰還してきたリベリア難民はみな廃墟と化した我が家を目にする。

UNHCR/C. SHIRLEY/CS/LBR-1997